上条「大覇星祭Lv.5勝ち抜き戦?」

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
上条「大覇星祭Ｌｖ．５勝ち抜き戦？」

【Ｎコード】
Ｎ７９８９Ｕ

【作者名】
チルノ

【あらすじ】
上条当麻は実質初めての大覇星祭でランダム競技に出る事になった、そこで出された種目とは、レベル５全員と勝ちぬきバトルをすることだった！！
その後の”統括理事長からの電話””突然出される条件””レベル５達との邂逅”
上条当麻とレベル５が交差する時物語は始まる――――――

（前書き）

この物語は、上条当麻の不幸な物語です。戦闘の描写はありますが、グロテスクな描写はありません。
純粋に楽しんでいただければ幸いです。

どうも、こんにちは。チルノともうします！新参者ですが書かせてもらいます！
今回は上条さんがＬｖ５の勝ち抜き戦をしていくという物語です。諸事情により第６位は出ません。
まあ、観客の声が多少やり過ぎかな？とか文才はあんまりないのでそこのところよろしくです！
ではどうぞ！

今、現在ここ学園都市では大覇星祭という街中の全ての学校をあげての大運動会が開催されている。
そしてその大覇星祭とは、能力の使用解除・学園都市外からの観客を招くなどのこともしている。
今回はその７日間の大覇星祭である不幸な少年に起こった事件を語らせていただこう――――――

??「はぁ～・・・・不幸だ・・・・。」

大きなため息をつき歩いているツンツン頭の少年、上条当麻はうなだれていた。なぜなら彼は七月二十八日を境に記憶を失っているため、実質大覇星祭というものは初めてであって右も左も分からない状態だからだ。

上条「開会式は何人もの校長の怒涛の長話し・・、さらには、うちの学校はやる気０・・、インデックスの奴のせいでお金も少なくなってきたし・・当の本人ははぐれたし。このあとは大覇星祭の恒例

らしいランダム種目決めがあるみたいだし・・不幸だ・・。」

この少年、実を言うと先程第1種目の棒倒しを終えてきたところなのだ。とあるロリ教師のためクラスが一丸となって勝利を収めたのだが、後にやる気は嘘のように消えていった。

上条「さてっと・・ここだな。それにしても、ランダム種目って何なんだ？青ピが言うには―――」

数時間前

青ピ「なんや、暑さにでもやられたんか？まあええか、ええか？かみやんランダム種目っていうのは、毎年大覇星祭で大きなスロットが回されるんや、そこで２３０万人の中から1人の出場者、７日間かけての種目、詳細が決められて1日1日の最終種目にそのランダム種目が行われるんや。出場者が与えられた種目の条件をクリアすると、学園都市から記念品がもらえるねん。」

青ピ「前回は可愛らしい女子中学生が選ばれて～わいもう興奮しっぱなしやったなぁ～　はぁはぁ／／／」

上条「種目ってどんなのがあるんだ？」

青ピ「軽いもんやと、７日間で積み上げられた食べ物を完食する競技やな。いままでできついもんやと、７人の高位能力者とのバトルとかやな～」

上条「」

青ピ「まあ、気にせんでも２３０万人の中から選ばれるなんてのは

そうそうあらへんって〜。」

そして今に至る――――

上条「・・・まあ、確かにそんな中から選ばれるなんてそうそうないよな！」

アナウンス「では、これより学園都市大覇星祭恒例のランダム競技の種目と出場者を決定します。なおこの結果は学園都市中に放送されますので、ご安心ください。」

アナウンス「では、始めます。」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！

観客席からとんでもないほどの盛り上がりと興奮の声が上がった。

上条「おお！すげえ盛り上がりだな！！」

上条当麻はこの盛り上がりを目の前に自分もテンションが上がってきた。

アナウンス「では、まず栄誉ある出場者を決めたいと思います。今回のスロットでは出場者の条件を絞り、その条件を満たす者を出場者とする条件決定法を用います。条件は能力レベル、歳、住んでいる学区となります。」

アナウンス「ではスロット、始動！！」

スロットが回りだす――――――

第一条件、住居学区が止まる――――”第７学区”！！

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！

上条「（俺の住んでいる学区だ・・・！？）」

上条は嫌な予感がした・・

第二条件、年齢が止まる―――――――――”高校生”！！

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おお！！！！

第三条件、能力値が止まる――――――――”Ｌｖ０”！！

嫌な予感が最高潮に達していた・・・

上条「・・・・・」

あああああああああああああああああああああああああああああああ

あああ！！！！！！！！！！！！！

そこら中のＬｖ０と思しき方々から悲鳴が上がる、その中には、

上条「あああああああああああああああああああああああああああ

あああああああ！！！」

上条当麻の声も混ざっていた。

アナウンス「それでは、この条件に会う人物をランダムに決定します。」

それでも、アナウンスは淡々と進行している。

アナウンス「しかし、今回はその前に種目を先に決定します。」
アナウンス「種目は、あみだくじにて決定されます。皆様、正面の電光掲示板をご覧ください。」
全員が、顔をそちらに向ける、そこにはあみだくじが表示されていた。
あみだくじが進みだす、そして一番したまでたどり着くとそこに表示されていた種目名は”Ｌｖ５勝ち抜き戦”とあった。
アナウンス「け・・決定いたしました！！こ・・今回の種目は”Ｌｖ５勝ち抜き戦”です！！」
全員が、言葉を失った・・・
アナウンス「（Ｌｖ０に挑ませるにしては過酷すぎる種目じゃね！！？？）」
アナウンサーもかなりドン引きしていた
アナウンス「で・・では、この種目に挑戦する出場者を決定します・・・」
アナウンサーがボタンを押す、すると条件に該当し不幸にも選ばれてしまった人物の顔が映し出された。
電光掲示板にはツンツン頭の少年が表示されていた、それは紛れもなく上条当麻だった・・・
上条「ふ・・・ふこおおおおおおだぁあああああああああああああ！！！！！！！！！」

青い空に少年の悲惨な叫びが響いた・・・

＊

青ピ「あ・・あはは、ま・・まあ頑張ってな？かみやん・・」

土御門「お・・・応援してるぜよ・・・」

クラスメイト１「そうだよ！元気出せって！」

上条「（放心状態）」

クラスメイト全員「（不憫すぎてなにも下手に手を出せねぇ）」

その時、ふいに上条当麻の携帯が鳴った。

上条「ピッ・・・はい、もしもし？上条ですが？」

？？「はじめまして、私の名前はアレイスター＝クロウリー、学園都市統括理事長だ」

上条「統括理事長！？でで・・・で、その理事長さんが何の用ですかね？」

アレイ「なに。今回のランダム種目について、少し話がある。」

アレイ「今回、さすがにＬｖ０の君にＬｖ５の７人に勝て、と言うのはいささか無理があると思ってね。そこで、Ｌｖ５のうち１人を強制的に不参加にし、その他のＬｖ５の能力詳細を公開しよう。このデータは大覇星祭の終了と同時に消させてもらうがね。そして、

この種目をクリアするにあたって、必ず倒さなければならないというわけではなくする。各Ｌｖ５の撃退条件をこなせばそれをクリアとする。クリアのあかつきには、君にＬｖ５と同様の奨学金を与える事にし、それとは別に記念品を贈ることにした。」

アレイ「どうだろう？これで君にも、勝機はあると思うのだが？」

上条「・・・わかりました！それで、挑むことにします。あと除外できるＬｖ５をこちらで選択してもいいですか？」

アレイ「そのくらいなら、いいだろう。誰にする？」

上条「素性も噂も聞かないので第６位をお願いします。」

アレイ「了承した、では明日から頑張ってくれたまえ。」

ピッ

上条「・・・」

土御門「かみやん、ちょっといいかにゃー？」

上条「・・・ああ。」

屋上

土御門「さっきの電話、理事長からだったよな？」

上条「ああ」

上条「Ｌｖ５勝ち抜き戦のクリア条件の軽減と報酬の増加を約束してくれた。」

土御門「それだけか？」

上条「ああ、これだけだけど？なんかあったのか？」

土御門「ん、まあなんでもないにゃー。」

同時刻

Ｌｖ５の第６位をのぞく全員がその種目の詳細を知った。

常盤台寮前

美琴「うわ・・！えげつないわね・・。Ｌｖ５勝ち抜き戦をＬｖ０の人にやらせるなんて・・・」

美琴「でも、これに勝つと欲しいものが手に入るって書いてあるし・・」

美琴「よし！相手には悪いけど、さくっと打ち負かしてゲコ太グッズコンプリートよ！！」

黒子「おねええさまあああああ！！！！！！遂に！遂に！！お姉様の勇士を学園都市中に知らしめる機会がきましたのおばばばばばっばばばばばば！！！」ビリビリビリ！

美琴「そんなんじゃないわよ！それにどさくさにまぎれて抱きつく

な！」

あるアジトの中

麦野「っち・・めんどくせえ・・。でも最近イライラしてるし（浜面と滝壺のいちゃつきぶりに）・・ストレス発散には丁度いいか・・・」

絹旗「麦野？どうかしましたか？」

絹旗「そのメール新しい仕事ですか？なら超さくっと片付けてしまいましょう。」

麦野「そんなんじゃないわよ。なんか大覇星祭でＬｖ５勝ち抜き戦をやるらしい、んでＬｖ０のカスを相手取るんだと。」

絹旗「そうですか（Ｌｖ０には超勝てない相手だと思うんですが・・これは超不運な人なんですね。そのＬｖ０・・）」

常盤台のある場所

食蜂「ふうん、まあ第６位は出ないようですし。他のＬｖ５を倒すことがあれば、相手してあげなくもないですわね・・・。」

どこかの路地裏

削板「ほお！Ｌｖ０でＬｖ５に挑むか！なかなか根性のある種目だが、Ｌｖ０で大丈夫なのか？まあ、全力で相手をしよう！根性おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

バキッ！！

スキルアウトＦ「ぶほおっ！！！」

どこかのアジト

垣根「ああん？んだこれは？ふざけてやがる。Ｌｖ０が勝てると思ってんのか？この俺によ。はん！ひねりつぶしてやんよ。」

屋台の前

一方通行「はァ？なンですかァ？これは？こンなふざけた種目を入れるなンて、上は何考えてっか分かンねェな。」

打ち止め「ちゃんと、手加減して相手しないとだめだよ！ってミサカはミサカは注意してみたり！」

一方通行「ハイハイ・・・」

あ、ちなみにＬｖ０が誰かはＬｖ５勢は知りません。

時は進んで２日目

青ピ「いよいよやなあ、かみやん。今日の相手のＬｖ５は一体何位なん？」

上条「たしか、今日連絡くれるらしいけど・・」

放て！心に刻んだ夢を・・ピッ

上条「来た来た、え～と今日の相手はＬｖ５の第三位・・」

常盤台前

美琴「つまり・・私ってわけね・・・」

パタンッ・・携帯を閉じる美琴

美琴「誰か知らないけど、ゲコ太の為だもの！頑張んないとね！」

初春「御坂さん、今日何かあるんですか？あ！もしかしてＬｖ５勝ち抜き戦の奴ですか？」

美琴「そうそう、私はトップバッターみたい。まあ、負ける気はしないわ！！」

黒子「まあ、そうですわね。Ｌｖ０の方がＬｖ５のお姉様に勝つなんて、それこそ奇跡の連続でも起こらない限りあり得ませんの。」

佐天「（なんだろ、すごくむかつく・・Ｌｖ０の人応援しよっと）」

――最終種目、Ｌｖ５勝ち抜き戦が始まります。場所は・・・――――

上条「ふぅ～・・・・・」

上条「よりにも寄って御坂か・・・」

上条「まあ、対策も練ったし体も鍛えてきた！うし、買ってインデックスと焼き肉だ！！」

わーーーー！！わーーーーーー！！！

初春「まだですかね！御坂さん！」

黒子「落ち着きなさいな。初春！お姉様ならもうすぐ出てきますわよ！そう、それはもう美しい登場をしてくれますわよ！うへへへへへ・・・／／／」

佐天「っと、始まりますよ！白井さん！初春！」

アナウンス「では、選手の入場です。まずはＬｖ５の第三位！〟超電磁砲〟こと常盤台のエース！御坂美琴！！！！」

美琴「あはは・・・」テクテク

わああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！

アナウンス「そして、今回！この御坂美琴に挑むは！Ｌｖ０の高校生！しかし理事長により今回は一撃御坂選手に入れれば勝ちだ！勝てる可能性はあります！選手登場！上条当麻！！！！」

上条「よう・・・ビリビリ・・」

美琴「！！！？？？・・な・・なんであんたが！！？？」

上条「不幸だったんだよ」

美琴「ああ、納得だわ」

アナウンス「この二人なんか、知り合いのようですね。では早速始めましょう！レディーーーファイト！！！」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！

美琴「行くわよ！！！」バチバチバチィ！！！！

雷撃の槍がまっすぐに飛んできた確実に当たれば死んでしまう攻撃だった！！

会場の皆がやばい！死んでしまう！！と上条の心配をした・・・。

しかし、吹き荒れる砂煙からは無傷の上条が出てきた。

観客「！！！？？？」

観客が騒然とした

美琴「相変わらず、しぶといわね・・・」

上条は美琴に向かって駆け出した

美琴は磁力を使って砂鉄の剣を作り上げ、上条に向かって振りおろした。しかし、上条はそれを右手で払いのける！

会場は二人の戦いを見て呆然としていた、それもそのはずだ。本来なら雷撃の槍の時点で上条はやられているはずなのだ、しかし上条には触れれば異能の力を打ち消す幻想殺しが宿っている、この程度の攻撃ならばなんなくかわしていくことができる。

美琴「行くわよ！たああああああああああ！！！」バチバチバ

チバチィ！！

美琴は砂鉄の剣をいくつも作りだし、連続で発射した！

上条「おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

上条はそれを避け、打ち消すことでやり過ごした。

上条「わりぃなビリビリ！今回は今後の生活がかかってんだ！負けてらんねえんだよ！！」

御坂「くっ！！？」

上条は御坂の目の前まで踏み込んだ、しかし御坂は磁力で距離を取りポケットからコインを取りだした。

観客Ａ「あれってまさか！」

観客Ｂ「超電磁砲（レールガン）！！！」

観客Ｃ「やばくない！あの高校生！！？」

黒子「お姉様！いくら類人猿だとしてもやりすぎですわ！！！？？」

美琴は何のためらいもなく超電磁砲を撃った

上条「おおおおおおおおおおおおおお！！」

しかし、その心配は上条によって吹き飛ばされる。上条は右手を構え向かってくる超電磁砲を受け止めた！！瞬間パキィン！！と音が鳴り超電磁砲がかき消された

上条「行くぜ御坂ァァァァァァァァァァァァ！！！！」

間髪いれず上条は走り出す。
上条はもう一度御坂の前まで踏み込んだ！

上条「おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

思いっきり振りかぶり右拳を放った！御坂はそのパンチを腕をクロスしてガードした、が。

アナウンス「上条選手の勝利です！！！！！信じられません！！！」

上条「え？・・あ！・・・ぃよっしゃああああああああああ！！！！！！」

美琴「ッ痛・・っはあ！！？なんでよ！まだ負けてないじゃない！！」

美琴は腕をおさえながら、アナウンサーに向かって大声で抗議する

アナウンス「いえ、あなたの負けですよ？この勝負はあなたが上条選手を戦闘不能にするか、上条選手があなたに一撃入れるかの勝負です。ガードしたとはいえ、一撃を入れたので上条選手の勝利です。」

美琴「」

観客「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

黒子「お姉様が負けた！？ありえませんの！！！」

初春「何なんですか！？あの人！超電磁砲まで効かないって！！あ
りえませんよ！？」

黒子と初春はそろって驚愕していた

佐天「いっよし！！！」

佐天は一人喜んでいた。

観客Ｄ「やべえ！なんだあいつ！あの超電磁砲に勝ちやがった！！
！」

観客Ｅ「はんぱねえ！！」

観客Ｆ「ていうか、あのひと超電磁砲の攻撃打ち消してなかった？」

アナウンス「あの～、上条選手？先程御坂選手の能力が効いてなか
ったように見えたんですが・・・？」

上条「ああ、俺はＬｖ０ですが、右手に異能の力なら触れただけで
打ち消すことのできる力”幻想殺し(イマジンブレイカー)”があるんです。」

アナウンス「は？えっ？てかそれって能力者にとって天敵の能力じ

ゃね？」

上条「まあ、Ｌｖ５の能力も消せますしね。」

観客「・・・・・・・っ！」

観客「（はんぱねええ！！！！！！！！！！！！！！！）」

会場にいる全ての人が驚愕した。

上条「（せっかく練った対策もあんまりいらなかったな・・・）」

上条は御坂対策にいろいろな動きを鍛錬してきたが、御坂は上条相手と知らなかったので意味をなさなかったようだった。とまあ、こうして、無事上条当麻は2日目の第一試合に勝利した

●幻想殺しＶＳ超電磁砲○

３日目

上条は、走っていた。なぜならこの学園都市にオリアナ＝トムソンとリドヴィア＝ロレンツェッティと言う二人の魔術師が潜り込んだからだ。目的は刺突杭剣(スタブソード)と言う霊装の取引だったが、真の目的は使徒十字(クローチェディピエトロ)という霊装で学園都市を手に入れようとしていたのである。今、現在上条は、その二人をナイトパレードを利用し追い払い、最終種目の会場に向かっている。

上条の手には携帯電話が握られているそこにはこうあった、”会場：○○学園グラウンド、今回の対戦相手は第４位原子崩し(メルトダウナー)麦野静利・・と。

上条「っはあ！はあ！！・・・ここか・・急がねえと！クソ、オリアナの奴思いっきり手間かけさせやがって・・・」

待合室

麦野「ああ～・・だっりぃ・・。なんでこの私がクソＬｖ０の相手なんてしなきゃなんねえんだよ・・」

麦野「よし、そのＬｖ０ぶ・ち・こ・ろ・し・か・く・て・い・ね☆」

浜絹滝フ「（（結局）相手が（超）可愛そうすぎる！！！！！）」

会場

観客Ｇ「今回は第４位だっけ？」

観客Ｈ「そうそう、てか第４位ってあんまり知らないんだよね～、でもなんか凄そうじゃない？能力名からして」

観客Ｉ「でもあの上条って奴の能力もすげえそ！なんせ、初戦での超電磁砲（レールガン）を倒したんだからな！！」

観客Ｊ「だよな！このまま第１位も倒したりして（笑）」

観客Ｋ「それは、ねーだろ。」ケラケラ

アナウンス「これよりＬｖ５勝ち抜き戦第２回戦を開始します。今回の上条選手の対戦相手は第４位原子崩（メルトダウナー）しこと！麦野静利！！！！

！」

麦野「クソＬｖ０の餓鬼なんぞ簡単にひねって終わりよ。」

絹旗「超頑張ってください！（まあ、負けなんて超あり得ませんけどね・・）」

アナウンス「では今回も見せてくれるのか！Ｌｖ０幻想殺し（イマジンブレイカー）こと！！！上条当麻あああ！！！！！」

アナウンス「今回、上条選手の勝利条件は麦野選手の頭に触れる事です！」

上条「うし！今日も買って焼き肉に近づくぞ！」

麦野「！？？（幻想殺し？、どっかで聞いたような・・・）」

アナウンス「では、レディ！ファイト！！」

麦野「まずは、小手調べね！」

麦野は一撃試しに放った。そこで、上条は右手をふるう、バキィ！と音が鳴り麦野の攻撃はかき消された。

麦野「！？（なるほど！思い出したわ！）」

麦野「あんたがあの幻想殺しか・・」

上条「俺の事知ってんのか？初めましてのはずなんだけど？」

麦野「ええ、知ってるわ・・絶対能力進化計画・・・覚えてる？」

麦野は上条にしか聞こえないように言った、上条は眼を見開いて驚いている。

上条「ってことは、お前あの計画の協力者か？」

麦野「いいえ、違うわ。私はあの計画を止めようと躍起になってた超電磁砲とやりあったのよ。」

麦野「でも、あの計画は何故か途中で中止になった・・なぜか気になって、調べたのよ・・」

麦野「そして分かった、理由はあの第１位がＬｖ０に負けたから・・」

麦野「つまり、あんたが一方通行（アクセラレータ）を倒したからよ！！！！！！！」

上条「・・・・・」

麦野「隠すようなもんでもねえだろ？」

アナウンス「え～、ちょっと待って下さい？よく聞き取れませんでしたが、上条選手は第１位と繋がりがあるようですね。」

観客「はああ！！！！！！！！！！？？？？？？？？？」

上条「あ～あ・・・また誤解が増えていく・・一方通行に会った時が怖いな・・」

観客L「何あいつ、最強と仲いいとか！！」

観客N「うひゃひゃひゃひゃひゃ！あいつもう最強でいいよもう！！」

麦野は頭をかいて、ため息をついた。

麦野「正直面倒だったけど、あんたが相手ならいいかもね！」

麦野は、さっきのとは違う極太レーザーを連発してきた。

上条「っ痛！！？」

あわてて右手をかざし、レーザーを打ち消す。

上条「この！！」

基本的に体一つで戦うので上条は近づかなければならない。上条は走り出す。

上条「おおおおおおおおおお！！！！！！」

麦野「近づけると思ってんのか！こらああ！！！」

麦野はレーザーを連発し続ける、上条は打ち消さず横に避けた。

上条「っく！近づけねぇ！！・・どうすれば・・！・」

上条は何かを思いついたように左右に動きながら前に進んでいく。
反復横とびの要領だ。

麦野「っち！狙いを定めさせねえつもりか！！なら！！」

麦野はポケットから板状の何かを取りだした、それを前に放り投げレーザーで打ち抜いたすると、板に当たったレーザーは拡散して大量の数になり上条を襲った。
拡散支援半導体（シリコンバーン）この板によって麦野は能力で弾幕を張る、実際に美琴とやりあった時もこれで苦戦させたのだ。

上条「どうするか・・・」

上条は駆け出す、麦野はさらに3枚の拡散支援半導体を取りだし1枚1枚打っていく、上条は大幅に走り、回り道をして麦野に近づく。
上条の髪や服に掠るが上条は少しづつ近づいていく。

上条「くっ・・この・・うお！！」

上条は、麦野の目の前2メートルほどまで近づいてきた

麦野「（なんだ！こいつ！？私の攻撃にビビってねえのか！？死ぬ気かこいつ！！）」

麦野は近づいてくる上条に少し焦りと恐怖を抱いていた。

上条「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」バキィイイイ！

上条は麦野の拡散支援半導体をはたき落とした。

麦野「くっ！？おおおおおおおおおおお！！！」

麦野は、上条に向けて攻撃を放とうとする。

上条「おぉおおおおりゃあああああああ！！！」

パキイイイイイン！！上条は攻撃が放たれる前に麦野の頭に触れ能力を打ち消した。

アナウンス「あ・・！！か・・上条選手の勝利です！！！頭に触れました！！」

オオオオ

くさ、そうすりゃもっと人生楽しめるぜ！あんた綺麗な顔してんだしさ。もっと笑って恋でもして楽しんでみろよ！」ニカッ

麦野「・・・き・・綺麗！？／／／／・・っふん！何が恋だ！Ｌｖ０を見下して何が悪いんだよ！！」

麦野「・・・で・・でも、あんたの言うことも聞いてやらないでもないわ！！／／／／／」

上条「・・？ん！そっか！じゃあな麦野！また会ったら気軽に話しかけてくれ！」

麦野「な・・！！気安く名前呼んでんじゃないわよ！！！／／／」

とまあ、こんな感じで上条はフラグをもう１つたてつつ勝利した。

●幻想殺しＶＳ原子崩し○

４日目

今現在、上条当麻は御坂美琴とご飯を食べていた。

美琴「ったく！なんなのよあんた！いつもは私との勝負に逃げてまともに勝負しない癖にさ！」

美琴「よし！決めた！このあと河原で勝負よ！！今度こそ決着付けてやるんだから！！」

上条「？なにいってんだよ？この前勝負付いただろ？ならもう勝負する理由なんてないだろ？」

美琴「むぐっ・・・確かにそうだけどさ・・・むぐぐ・・」

美琴「まあ、いいわ！で？今日はどいつと戦うの？第３位と４位をまとめて倒してんだから負けんじゃないわよ？」

上条「わかってんよ、なんせ生活費がかかってるからな。え～と今日は第７位の削板軍覇って奴だな。ナンバーセブンって通称があるらしい。詳細によると原石だな。念動力の一種らしいが本人もよくわからないらしい。」

美琴「ふ～ん、あの第７位か・・・ってかあんたも生まれつきあった能力なのになんでこいつはＬｖ５であんたはＬｖ０なのかしらね。」

上条「測定できないからだろ。てか今回Ｌｖ５全員倒すと、おれも晴れてＬｖ５の仲間入りだぜ？ぁいらなかったのか？」

美琴「っはあああああああ！？？なにそれ！あんたが！？Ｌｖ５の仲間入り！？」

上条「うん、第４位倒したあたりで理事長さんからそう決定したって連絡きたし。」

美琴「それって、あんた第何位になるの？」

上条「ん～多分お前よりは上なんじゃね？倒したし」

美琴「」

数時間後

アナウンス「では、今回も張り切っていきましょう！今回はＬｖ５第７位ナンバーセブンこと削板軍覇！！！」

軍覇「根性おおおおおおおおおおおお！！！！！」

アナウンス「今日で３回目！挑戦者！Ｌｖ０幻想殺し！上条当麻！！！」

上条「！！？？」

軍覇「！！？？」

上条「（なんか）」

軍覇「（あいつとは）」

上軍「（仲良くなれそうな気がする！！！！）」

上条「よろしく頼むぜ！！！！」

軍覇「おおお！！！」

アナウンス「今回の勝利条件は、相手に身に付けているものを奪うこと！です！！ではレディーー！！ファイト！！」

上条「いくぞおおおお！！！」

軍覇「おおお！！すごいぱあああああああんち！！」

上条「ぶっ！ぐっはあああああ！！！」

上条は軍覇と１０ｍは離れていたのに吹っ飛ばされた。

上条「？？んだ・・この攻撃は・・」

軍覇「知らん！！前までは説明できたがある奴が間違っていると指摘して以来どう説明していいか分からなくなったんでな！！」

上条「そうかよ！こん畜生！！だがここは根性で乗り切ってやんよ！！！！！！！！！！」

軍覇「っへ！おまえなかなか根性あんじゃねえか！！行くぞお！！！」

上条「おおおお

軍覇「あああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！

奪っていました！！この勝負上条選手の勝利です！！！！」

おおおお

うだ？」
麦野「ん、良いわよ。ちょうどお腹空いてたし。」
軍覇「俺もだ！早速食いに行こう！」
麦野「（ホントは当麻と二人が良かったのに・・・）」

アナウンス「では、今日も張り切って参りましょう。今回のＬｖ５は第５位！心理掌握（メンタルアウト）事！食蜂操折！」
食蜂「・・・」
アナウンス「そして、今回の挑戦者！Ｌｖ０！幻想殺し《イマジンブレイカー》事！上条当麻！」
わああああああああああああああああ！！！！！
食蜂「（どうしよう。私の能力さっきから効いてない・・・）」
上条「ん？（何かあの子には簡単に勝てる気がする・・・）」
アナウンス「ではレディーファイト！！」
食蜂「！？」
上条「行くぜ！おおおおおおおおおおおお！！！！！！」
食蜂「ちょっ！待って！？待って！？無理！棄権！降参んんん！」
上条「は？」

アナウンス「食蜂選手？棄権ですか？」

食蜂「だってさっきから私の能力効いてないんだもん！！勝ち目無いじゃない！」

観客席

御坂「まぁ、あいつには効かないわよね～・・・」

観客「（不憫だ！！！！！）」

上条「え～と・・じゃあ、おれの勝ちってことで？」

アナウンス「あ・・え～とはい、上条選手の勝ち～です・・ね！」

観客「・・・

上条「はあ～、さすがに疲れた・・・、あと残ってんのはあの一方通行と知らない奴だが一方通行に匹敵する能力保持者の第２位、たしか・・未元物質（ダークマター）だったか。」

上条「不幸だ・・」

インデックス「とうま～おなかへったんだよ？そろそろご飯が食べたいかも」

上条「あ～、悪いなインデックス・・ちょっと待ってろ・・、すぐなんか買ってくるからさ。」

インデックス「わかったんだ・・よ？」

上条「どうした？インデックス？」

インデックス「あれ、なんか屋台までの道が閉じちゃってるんだよ？」

上条「え？あ、張り紙があるなになに？『本日から屋台の場所は変更になりました。変更場所は、第四学区〇〇公園になります。』ってええ！！？」

インデックス「とうま？ご飯は？」ゴゴゴゴゴゴ

上条「え～・・と・・我慢して下さいっていうのは・・だめでせう？」

インデックス「とおおおおおまあああああああああ！！！！！」ガブゥゥ！！

上条「不幸だあああああああああ！！」

アナウンス「さて、そろそろ。この種目も大詰め！あと2日となりました！！今回はＬｖ５の第二位！未元物質（ダークマター）こと！垣根帝督！！」

垣根「ちっ・・Ｌｖ０だと思ってたのによ・・ここまで来るとただのＬｖ０じゃねえな・・」

アナウンス「さておなじみ今日もやってくれるのか！幻想・・（ｒｙ」

アナウンス「ちなみに今回はガチのバトル！どっちかが倒れるまでやってもらいます！」

上条「・・・帰りてえ・・」

垣根「お前が、あの第1位をのしたＬｖ０か・・相手にとって不足はねえな。」バサッ！

上条「おいおい・・羽根って天使かよ・・」

垣根「はっ・・これが、俺の未元物質だ。」

上条「似合ってねえな・・」

垣根「心配するな、自覚はある。」

上条「そうかよ・・（やっべ・・空とばれたら何も出来ねえじゃん・

）」

垣根「安心しろ、空飛んだりはしねえ・・んじゃ、行くぜ！！」ゴウ！！！！

上条「ガッ！！？（っんだ！？これ、あつっ！）」

垣根「紫外線の性質をもった未元物質だ！普段受けてるだろうが、今じゃそいつで焼け死ねるぜ！！」

上条「くっ！」ダッ！

上条「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

垣根「はっ！なお突っ込んでくるか！なら、死んどけ！」羽根、ゴウ！！

上条「おおおおおおおおおお！！」バキィ！

垣根「んな！！俺の未元物質が！！？」

上条「くらえええええ！！！」バキィ！！！

垣根「グフッ！！ンの野郎！」ガバッ！

上条「・・捕まえたぞ・・！！」ガシ！

垣根「な！？能力が使えねえ・・！？まさか、お前が噂の幻想殺しか・・！？」

垣根「くそ！この野郎！！」バキ！ゲシ！！

上条「ガッ！グハッ！？こんのおおお！！」バキィ！

垣根「ガッ！！？」

その後およそ５分間二人は能力無しの殴り合いを続けた。片方垣根はいつ倒れてもおかしくないほどボロボロになっていたが、垣根はＬｖ５としてのプライドで立っていた。上条は、殴り合いの中で喧嘩慣れから余りダメージを負っていなかった。

垣根「ぜぇ・・はぁ・・ぜぇ・・はぁ・・こ・・の・・！！俺が・・てめえみたいな・・Ｌｖ０に負けるわけが・・はぁ・・」

上条「はぁ・・はぁ・・そんなの関係ねぇんだよ！Ｌｖ５だとかＬｖ０だとかそんなの関係ねぇ！てめぇがどんだけ強かろうが！どんな能力を持とうが！Ｌｖ０が勝てない理由にはならねえ！もっと他人と付き合っちゃいけねえ理由にはならねえだろうが！」

垣根「う・・るせえ・・はぁ・・はぁ・・俺はＬｖ５だ・・！！第２位だ・・！・・俺は化け物同然なんだよ・・はぁ・・はぁ・・そんな俺が・・他人と関わる何ぞ許されるわけねえだろうがァ！！」

上条「そんなわけねえよ！てめえは化けモンなんかじゃねえ！お前は人と関わっていんだ！いいぜ、お前が化け物だから、人と関わっちゃいけねえって言うんならまずはその幻想をぶち殺す！！！」バキイイ！！！！

垣根「ガッ！！（あぁ、そうか・・一方通行でも勝てねえわけだ・・かなわねえな、上条当麻・・）」

アナウンス「上条選手の勝利！！！」

観客「おおおお

上条「お前はもうちょっと人を信じて歩み寄ってこい！案外お前が思ってるような考えを持った人間なんてそんなにいないもんだぞ？」

垣根「ん・・じゃあ、今度な・・。」

垣根「あぁ、っつっても疲れた！にしてもお前、これで第６位以外のＬｖ５全員とやって勝ったことになるんだよな？」

上条「ん？え？あー・・あっ！？そう言われればそうだ！」キリッ

垣根「なんで、真顔で言うんだよ・・まあいい明日はいよいよあの一方通行とやるわけだが・・勝てんのか？あいつに・・」

上条「さあな、でもこっちも生活がかかってるわけだしな！やれるだけやってみるさ！」

垣根「はあ？生活費？」キョトン

上条「おう！」

垣根「ぷっ・・あはははははは！！」

上条「何だよ！？何がおかしいんだ！」

垣根「生活費の為に第１位にケンカ売るとかお前ほんと面白いな！！あはははは！」

上条「確かに・・考えればあいつと戦うのかよ・・不幸だ・・」

しかし、そういいながらも上条は笑っていた。

●幻想殺しＶＳ未元物質○

最終日

上条「なあ、青髪？」

青ピ「ん？なんや？かみやん？」

上条「おれさ、今気付いたんだけどさ・・第６位と１位、抜いたＬｖ５のメアドゲットしちゃった・・」

青ピ「おお！そういえばそうやな！でもかみやん、１つ間違うてるで？」

上条「？何がだよ？」

青ピ「かみやんの持ってないＬｖ５のメアドは第１位だけや。」

上条「は？訳が分からないんだが？」

青ピ「だって、僕が第６位のＬｖ５やもん。」

上条「へー、なら納得だわ・・ってえええええ！！！？」

青ピ「Ｌｖ５第６位重力制圧（グラビティセプレーション）や」

上条「マジか、どういう能力なんだ？」

青ピ「ん～説明面倒やけど簡単言えばテレキネシス系の能力でよう

使うのは重力みたいに圧力をかけて、相手をまとめて這いつくばらせる感じや」

上条「へ～、それはそれで応用も利きそうだな。」

青ピ「内緒やぞ？かみやん、わいはＬｖ０として皆と仲よう過ごしたいんやから。」

上条「分かったよ。んじゃ、おれはそろそろ・・。」

青ピ「応援してるわ、がんばってな、かみやん。」

アナウンス「さて、始まりました！最終日！これまで、Ｌｖ５に臆せず勝ち抜いてきた上条選手は今日！勝てるのか！

アナウンス「では、登場していただきましょう！Ｌｖ５！第１位！！！あらゆるベクトルを操る最強！！

一方通行（アクセラレータ）！！！」

一方「っち・・なンで、俺が・・・」

少し前

一方「離せ！クソガキィ！！！！」

打ち止め「だめーー！！あなたは少しくらいこのお祭りを楽しんだらどうなの！ってミサカはミサカは文句を言ってみたり！！」

打ち止め「あなたでも参加できる競技があるんだから、せめて１種

目くらいでて！ってミサカはミサカは
お願いしてみたり！」

一方「あァ！もう分かった！でりゃいいンだろ！でりゃ！！」

打ち止め「わーいってミサカはミサカはあなたが素直になったことに喜んでみたり！」

現在

一方「っちィ・・・」

アナウンス「迫力ありますね！では、登場していただきましょうＬｖ０（ｒｙ」

アナウンス「今回は、ガチバトルにすると死人が出そうなので、先に１撃与えた方の勝ちとします！！」

一方「・・・・なァんでてめェがここにいンだよ三下ァ・・」カチッ

上条「よう・・久しぶりだなアクセラレータ・・」

上条「不幸にも、抽選で選ばれて気が付いたらこのざまだよ・・」

一方「この勝負は１撃喰らわせた方の勝ちだったよなァ？」

上条「あ・・ああ」

一方「てめェにはデケェ借りがあっからよ、この１撃は重いぜェ？下手したらこれで死ねるかもなァ。」

上条「いやいや、借りなんて気にしないでいいんだよ！？」

一方「行くぞォ！！」ダン！！

上条「うお！！？」ガバッ！

上条「あぶねえな！（アクセラレータに１撃与えるには俺の右手で直接殴るしかねえ・・どうやって近づくか・・）」

一方「くかか！！どうした三下ァ！！」ドゴォ！！ゴガァ！！

上条「くそ！近づけねえぇ！」

上条「行くっきゃねえか！！」ダッ！

上条「こんのおおおおおおお！！！！」

一方「ハッ！オラオラ！」小石連発　ガン！ガン！

上条「っと！おらっ！うわ！？」

一方「すばしっこいヤロウだな！！」

上条「クソッ！どうする！・・っは！？」ガバッ（上を向く）

一方「オラくらえ！！」ドガガガガガガガガ！！（サッカーゴールやハードル等をたたきつける）

ズガアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！！！！！！！

！！！

後をぶち壊すことなンざするもんじゃねェだろ・・」

上条「そうか・・お前変わったな・・」

一方「・・・俺はオマエみたいなヒーローにはなれねェよ。」

上条「・・そうか、なあアクセラレータ・・」

一方「ン？何だよ三下ァ・・」

上条「今度、俺Ｌｖ５皆誘って遊びに行くんだよお前も来いよ。」

一方「・・・ふン、気が向いたらな。」

こうして、上条は勝った、しかしこの時上条は後におきる自分の影響と周りの環境の変化に戸惑うことになる。

●幻想殺しＶＳ一方通行○

大覇星祭終了

後日談

軍覇「おい当麻！聞いたぞ！お前Ｌｖ５に認定されたんだってな！」

垣根「まあ、当然だろ。なんせガチバトルで俺に勝ったんだし。ルール上とはいえ第１位にも一応勝ってんだしな。」

麦野「で？当麻は第何位になったわけ？」

上条「理事長が言うには第０位だとさ。」

御坂「第０位？なにそれ？」

上条「なんでも、俺の能力は能力者相手ならＬｖ５並みの効力を持つけど、無能力者相手ならＬｖ０と変わんねえだろ？だから一応Ｌｖ５だけど序列的には例外の第０位って感じらしい。」

上条「でも！Ｌｖ５になったからお金も困らなくなって！食費もかなり楽になったんですよ！！」

一方「オマエ、いままでどンな生活してたンだよ・・」

青ピ「まあ、いいやん。気にせんであげえや」

食蜂「それにしても、情報が皆無だった第６位がこんな人だったとは驚きよね・・」

上条「ま、俺も最初は驚いたけどさ、もういいじゃねえか！今日は遊ぼうぜ！」

わははは！！ちょっと待ちなさいよ！うるせェ・・、根性オオ！！俺の未元物質に（ｒｙ、そこの娘、ボクとお茶でもせーへん！

その後Ｌｖ５のメンバーが楽しげに歩いている姿がたびたび、目撃されているらしい。

完

（後書き）

あとがき

どうでしたか？自分的には、あまりおすすめできる出来にはならなかったのですが、面白いと思っていただければ、幸いです。
今度は、短編でちょいちょい書いていきたいと思います。ではまた機会があれば、お会いしましょう。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7989u/

上条「大覇星祭Lv.5勝ち抜き戦?」

2011年7月12日04時03分発行